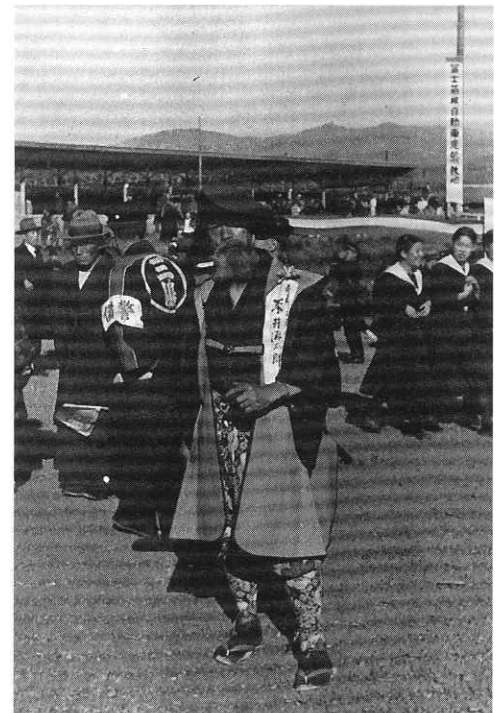




農兵節と

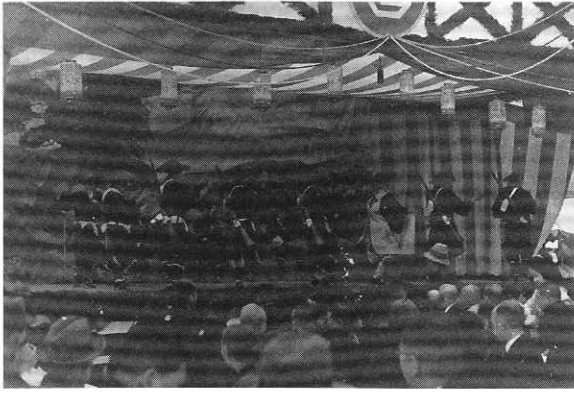
平井源太郎



三島市郷土館

佐々木古桜画 農兵節（昭和初期）（川口泰弘氏蔵）

昭和9年 三島駅開業時の平井源太郎



昭和9年12月1日、三島駅開業祝賀会で踊られた農兵節（陣羽織姿が源太郎）



平井源太郎

平井源太郎と農兵節

一、「農兵節」の宣伝

「富士の白雪やノエ」で始まる農兵節は、三嶋大社の夏祭りのパレードで踊られるなど、三島市民には最も身近な民謡であり、静岡県を代表する民謡として全国に知れ渡っている。

この農兵節の起源については諸説があるが、その名を全国に知らしめたのは、平井源太郎の一身を投げ打って打ち込んだ宣伝活動のたまものである。

大正末頃、三島の花柳界は、三島に駐留する第二・第三野戦重砲兵連隊の軍人達でぎわっていた。ここで盛んに唄われていた「ノエ節」を洗練し、三島の民謡として昭和初期に売り出したのが、平井源太郎と矢田孝之である。

ことに、平井源太郎はそれまでの「ノエ節」を幕末の三島で行われた農兵訓練にちなみ「農兵節」と改め、農兵踊りを完成させ、単身東京や大阪まで宣伝に赴いていた。

その宣伝の方法が大変ユニークで、農兵指揮官の葦山笠・陣羽織・大・小刀を腰に差し、「農兵節」と書いた幟を立てて、人目を引いたという。

後には、近在の若者を引き連れ小田原・品川・大阪などで盛んに農兵節と踊りを披露している。

この時、農村不況であえいでいた、箱根坂地区の良質な大根もいっしょに宣伝し、終には、大阪市場の開拓に成功して、大根の他にんじん、さつま芋など坂ものと呼ばれた野菜が関西に出荷されるようになった。

農兵節の宣伝が最も盛り上がったのは、レコード吹込の頃であろう。昭和八、九年頃源太郎が居候していた芝町の姉の家では、毎日のように芸者さんや、踊りの人が来て、大騒ぎだったという。

農兵節が初めてレコード化され、発売され

たのは、昭和九年二月のことである。日本コロムビアの吹込みで人気歌手赤坂小梅が若々しい声を聞かせている。B面は、声楽家丸山和歌子の唄で、コロムビアオーケストラの伴奏による、近代的演奏となっている。

このレコードの宣伝は力が入っていたとみえ、市内のレコード店前や小学校での宣伝写真が残っている。

次いで、九年五月二十五日、新太陽レコードでも「ノエ節」（農兵節）が吹き込まれた。この時は三島の芸者十郎の唄で、伴奏も地元の人達によるものである。またB面は、資金を提供した矢田孝之が自慢の声で「箱根の山からノエ」で始まる（元）農兵節を披露している。

この年は、三島にとっても画期的な年であった。九年十二月一日、東海道線の丹那トンネルが開通し、三島駅が開業したのである。明治二十二年に東海道線（当時は御殿場経由）が開通したことにより、宿場町三島は衰微した。以来、駅の開設は町民の宿願であり、開業当日は駅前で空前のお祭り騒ぎがくり広げられた。夏祭り名物のしゃぎりや山車と共に、上から下まで黒装束の農兵達も多数くり出し、源太郎はその指揮官の衣装で得意満面で踊っている。

大根の宣伝と農兵節という組み合わせの街頭宣伝とレコードやラジオの普及で、昭和十年前後には、農兵節は全国にすっかり有名となっていた。

農兵節を三島の民謡として売り出そうという源太郎と孝之の希望が予想以上の反響を呼んでいったのであった。

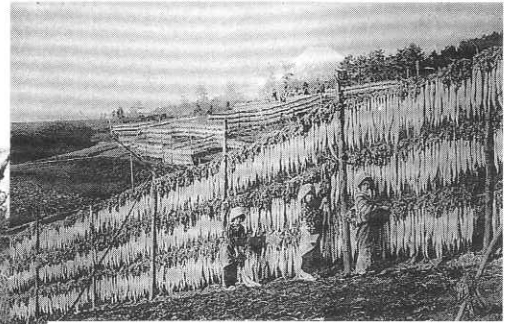
今、各地で三島といってもピンとこない人も農兵節と言えば、すぐわかるほど、三島の名を広めたのは、源太郎の見返りを求めず、世間の評判など気にしない、農兵節を広めようという一途な思いに他ならない。



三島のレコード店前で農兵節の宣伝をする源太郎（昭和九年頃）



農兵節の吹込風景（唄、十郎・矢田孝之、新太陽レコード）



箱根大根絵葉書、昭和9年頃
(矢田孝之撮影)

農兵踊絵葉書、昭和9年頃
(矢田孝之撮影)



二、平井源太郎の生涯

農兵節の生みの親とも言える平井源太郎は、三島の久保町（現在の中央町）で酒屋を営んだ「大宮源」の長男として明治十五年（一八八二）四月十七日に生まれた。大正八年に連隊が駐留すると、軍隊にたくあん漬けを納めるなど大きな商売もしていた。ところが昭和初期、運悪く従業員が伝染病にかかり、そのため軍隊への納入が差し止められ、ついに大宮源は店を閉じることになる。

この後、源太郎は失意の中で家業を捨て、街頭に立ち、「商道改革と農村の協同化」を

訴え始めた。頭がよく弁説が立つ人で、鋭い口調で銀行を批判し、中卸の無駄を省き、生産者と小売・消費者との直結を説いた。今で言う「流通革命」の先駆である。富む商人よりも、貧しい農業生産者や、購買する庶民のことを思つての発想であつた。しかし、当時の三島で源太郎の考えを理解する人はほとんどいなかった。町会議員や県会議員に何回も立候補し、落選を重ねている。

源太郎独特の風貌から違和感を覚えた人も多かつたに違いない。明治の長老よろしく、フロックコートでの弁説や、農兵指揮官姿で街をかつ歩するなど、静かな町ではひととき目立つ存在だつた。

そうした源太郎の言行をやゆして、「奇人」「変人」とあざける人も多かつた。

しかしわずかであるが、源太郎の功績と先見性を高く評価する人もいた。例えば源太郎と同じ昭和十二年に町会議員となつた、山田重太郎や、森崎平作である。山田は、錦田村産業組合（錦田農協の前身）と大阪市場商業会議所の取引を成立させ箱根の大根を大量出荷する端緒を開いたことを高く評価している。また森崎は、源太郎没後の昭和二十二年、箱根初音ヶ原松並木の入口に源太郎の書による「大根の碑」を建て、大根の宣伝に尽くした源太郎を顕彰している。

源太郎は面倒見がよく、関西の浪花節の第一人者港屋小柳丸を三島へ呼んで世話をし、浪花節の才能ある若者を見出だして小柳丸の弟子にし、港屋小柳として売り出している。

箱根大根の宣伝にしても、誰に頼まれたわけでもなく、困窮している坂（箱根坂地区）の農民たちのために何か一肌ぬごうという気持ちで、始めたものであつた。残念ながら、坂の農民の多くは、源太郎のことを理解せず、源太郎や孝之が農兵節の宣伝にやってきて賛同する人はあまりいなかったという。

家業が倒産し、裸一貫となつた源太郎は、物欲・俗世の世界から抜けだし、心のままに

自らの半生を、一文にもならない、農兵節と箱根大根の宣伝にささげた。昭和十五年十二月二十三日、五十八才で亡くなつた。墓は川原ヶ谷願成寺にある。

源太郎が種まいた農兵節と箱根大根は大きく育ち、没後五十六年たつた今、全国に知られた三島の象徴・名産となつている。これこそ源太郎が心から望んでいたものであろう。

三、源太郎と農兵節・農兵踊りの完成

農兵節の歌詞と踊りに関して、源太郎の関与が認められる。

農兵節の元唄が大正末期「箱根の山からノエ」であつたことは、矢田孝之が残した文にも記されている。現在の「富士の白雪：」の詞は、江戸時代中期の民謡集「山家鳥蟲歌」に「山な白雪、朝日に融ける、融けて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧水」として載る言い回しであり、また『駿国雑誌』巻十二に「ア、エ富士の白雪朝日とけて、とけて流れて三島へ落ちる、三島女郎衆は寝てとける、そラダ寝てとけるエ」と記され、馬子唄・投節・道中節と解説されている。つまり、古くから知られていた唄の詞を借りてノエ節のメロディに合わせ、新たな尻取り歌として作られていったのであろう。

流行していたお座敷唄を源太郎は話の落ちがいいように、一部を改編したと見た方がよいであろう。昭和初期の資料やレコードの歌詞は一部ずつ異なっており、唄い手等の好みで変えられていったと考えられる。

次に農兵踊りに関してであるが、故戸羽山瀚氏が「源太郎が」昭和六年農兵踊りを創成した」と書いており（「ふるさとの想い出写真集 三島・修善寺」）この頃、源太郎は姉のおの家八畳の和室で、一人で農兵節の踊りを考案・研究していたという。

もう一つ、二日町の言成地蔵伝説と、農兵節の歌詞とが関わりがあるという説がある。江戸時代初期の貞享七年（一六八七）に明石の殿様の大名行列を横切ってしまった娘小菊

が手打ちにされ、それを祀つたのが言成地蔵である。昭和初期の浪花節の第一人者港屋小柳丸は、この小菊の物語「明石の切捨て」を得意として大いに聴衆の涙をしばらせた。三島で小柳丸の世話をした源太郎がネタの提供あるいは話をふくらませる助言をした可能性は考えられる。源太郎が農兵節の尻とり形式の歌詞を完成したのであれば、念頭に明石の殿様への風刺があつたと考えても不思議ではない。

四、源太郎の書

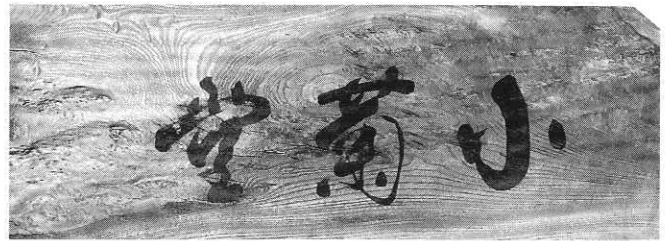
源太郎は書もよくし、落選を重ねた町議会議の選挙運動の看板は全て自筆で書いている。硯に向かう源太郎の姿が度々見られ、工夫をこらして詞文を書いていたという。

現在、源太郎の自筆と確認されたものは、言成地蔵堂の木額「小菊堂」、手無地蔵堂の木額「手無地蔵尊」、川口家所蔵扁額「農兵節」だけである。また石碑に刻まれた書は、水泉園の「富士の白雪」の碑、三島市役所前の「農兵訓練場址」の碑の裏の解説文、初音ヶ原松並木入口の「大根の碑」である。流れるような書体には、農兵節や大根の宣伝にかけた情熱を彷彿させる。



農兵節レコードの宣伝風景（市内小学校）

農兵節（ノーエ節）のルーツ



「小菊堂」平井源太郎書（二日町、言成地蔵堂）



「手無地蔵尊」昭和10年7月24日、平井源太郎書（中、手無地蔵堂）

一、農兵訓練の時に使用された行進曲

三島の古くからの言い伝えで、農兵節（ノーエ節）は、幕末、葦山代官江川太郎左衛門の農兵の洋式訓練に採用され、全国に流行したというものである。

この説が最も詳しく書かれている昭和四十年代中頃の農兵節普及会のパンフレットの解説を要約してみよう。

代官江川英龍（担庵公）が嘉永三年（一八五〇）正月、配下の青年に、洋式農兵訓練を実施した。幕府の許可が出ない試案の段階であったが、諸藩からの見学も多く、葦山の鉄砲方の役人が指導した。この時、長崎伝習から帰った家臣の柏木総蔵から聞いた音律が担庵公の耳にとまり、即席行進曲となって唄いはじめられた。文久三年（一八六三）には農兵訓練が幕府に認められ、この後三島訓練場では農兵節を鼓笛隊によって吹奏させ志気を鼓舞し、農兵節は全国に流行し、行進曲調民謡の先駆となった、というものである。

この他、昭和初期の『三島農兵節由来』（萬字樓発行）では、嘉永六年（一八五三）英龍が幕府の許しを得て、三島訓練所で農兵訓練を行った時の唄とある。

実は、この話にはいくつかの疑問点がある。まず、三島で農兵訓練が実施された時期は文久三年（一八六三）十一月以後のことであり、嘉永三・六年説の根拠が薄いこと。その前から担庵公は私的に手代の子弟と江川家直轄の金谷村農兵（鉄砲組）を組織し訓練していたが、三島で訓練を行っていたわけではない。もう一つ、柏木総蔵（後の足利県令）が長崎に留学したのは安政元年（一八五四）であり、

年代がくい違ふ。

仮に、文久三年の農兵訓練の時の話とすれば、すでに担庵公は文久二年正月に病没しているの、担庵公の関与はないはずである。

以上のように、話をおもしろく宣伝するための脚色が入っていて、どこまで史実が反映しているのか不明である。

郷土史家の故戸羽山瀚氏は、三島市誌（下巻）や『ふるさとの写真集 三島・修善寺』等で、農兵節は長崎帰りの留學生の伝えた曲であるとか、農兵の洋式訓練で奏された旨を強調している。年代不祥ではあるが、農兵訓練の時に使用されたというのは全くのつくり話とも言いかねる。

二、横浜野毛山節伝来説

昭和三十年代以後発行された民謡関係の文献資料の多くは、農兵節は横浜の野毛山節（ノーエ節）が三島に伝わり農兵節（ノーエ節）が作られたという説をとっている。

野毛山節は文久二年（一八六二）横浜で作られたといわれ、詞の内容は、野毛山から、近くの外国人居留地を見下ろした光景で、異人館や蒸気船・演習風景が唄われている。この説を最も詳しく述べたものを紹介しよう。

幕末文久二年（一八六二）頃、横浜で「野毛の山からノーエ」が始まる「ノーエ節」が流行し、明治初年頃に少し形が変わって「サイサイ節」または「野毛の山から」の名で、また流行した。この第二次流行の前に大阪で、大阪城におかれた第二十師団の有様を「天満橋からノーエ」と唄い流行した。大正九年頃

に添田唾蟬坊が「新ノーエ節」として「上野の山からノーエ」を唄うなど、第三次流行となった。三島の農兵節は、明治（注・大正の間違いか）の始め頃、三島に砲兵旅団がおかれた時、土地の花柳界の人達が「富士の白雪アノーエ」と替え歌を作ったことに始まる。（高橋翔太郎『民謡歴史散歩 関東・中部篇』より）というもの。

注目されるのは、明治初年に流行した「野毛の山からノーエ」と、昭和になって農兵節を源太郎と共に広めた矢田孝之が書き残した「大正末期の（元）ノーエ節」の歌詞の類似である。「野毛の山箱根の山」「異人館三島」以外は全く同じ詞であり、強い影響関係が伺える。矢田孝之は「箱根の山からノーエ」は幕末の訓練の時の唄であり、「富士の白雪ノーエ」は平井源太郎が作った詞であると、話していたという。

はたして（元）農兵節「箱根の山から」の唄がどこまで昔にさかのぼることができるだろうか。

三、大阪經由伝来説

先の野毛山節の項で記したように、明治初期に大阪で流行した「ノーエ節」は「天満橋からノーエ（中略）鉄砲かついで（中略）小隊進め」という大阪城の第二十師団の練兵の様子を唄っており、野毛山節とほぼ同様の歌詞である。

次いで大正六・七年に復活したのが「大阪城からノーエ（略）城から練兵場を見れば」である。囃子の「オッペコシヤリコノーエ」の詞は幕末軍隊を訓練した時使用したメロディという。（小西永軒『大阪の唄』）

そして三島の農兵節は、大阪師団を除隊した兵士が、三島へ入隊する後輩に口伝えたも

農兵節

源水書

「農兵節 為普及」平井源太郎書（川口泰弘氏蔵）

のが三島に根をおろしたという。（高橋掬太郎「日本民謡の旅」）

四、農兵節（ノイエ節）の原曲はオランダの曲か？

農兵節・野毛山節は「付点八分音符と十六分音符」という江戸時代の民謡にはない独特のリズムを多用している。これは外国から入ってきたリズムであろうと、民謡研究家小塩敏典氏は指摘する。

幕末、外国の文化に触れることができたのはオランダ・中国との唯一の交易が許されていた長崎であった。ことに安政二年（一八五五）からオランダ士官以下二十二人を教官として長崎海軍伝習所が設けられ、わずか四年間ではあるが、オランダ海軍の教育を各地からの伝習生が受けた。鼓笛楽も導入され、この時伝授されたと思われる西洋太鼓の楽譜について故升本清氏が「幕末海軍鼓笛楽」に発表されている。この研究の成果が昭和四十八年一月四日夜NHK総合放映のスポットライト「ヤッパンマルス」という番組になつている。特に西洋太鼓の楽譜を再現した演奏が行われたが、視聴した人の話では、その曲は農兵節によく似ていたという。オランダ大使館のファン・デル・スロート氏の尽力により調査の結果、十九世紀のオランダ行進曲であることが解明されている。残念ながらNHKに当時の映像が保存されておらず、関係者も亡くなつていいため、詳細な内容は不明である。これらの太鼓曲の中に農兵節（ノイエ節）の原曲が含まれているかどうかかわらないが、江川英龍担庵公が長崎海軍伝習所に派遣した、柏木総蔵・望月大象等も当然聞いていたはずであり、後に農兵調練の行軍に使用された可能性は十分あると思われる。江川家文書の中

に、西洋太鼓の購入の記録が残っており、この太鼓で西洋式行軍の指揮がとられたものと考えられる。

また海軍伝習所の太鼓は、鹿児島・熊本・福岡・萩・佐賀・福山・掛川等からの伝習生に伝わり、各地域に伝えられた。

現在残る太鼓の譜の中に「ヤッパンマルス」という曲がある。もし農兵節（ノイエ節）の原曲がこのオランダの行進曲であるならば、各地にそのリズムは伝わっているはずである。

以上が農兵節のルーツについて、調査した概要である。

原曲がオランダの行進曲であるか確認はとれなかったが、もし農兵節の原曲が三島で奏されていたとすれば、それは、長崎からの留学生が帰郷した安政三年以後であろう。また伝説のように、行軍のメロディに「富士の白雪」あるいは「箱根の山から」等の歌詞がつけられ行軍あるいは酒席で唄われたとしても、全国的に大流行したかどうか疑問である。

ただ農兵の調練は三島・三島だけでなく、三島代官支配下の富士川河原・江尻・原・藤沢・津久井・八王子・立川・田無・所沢・与瀬でも行われ、調練に農兵節の旋律が使用された可能性も考えたい。

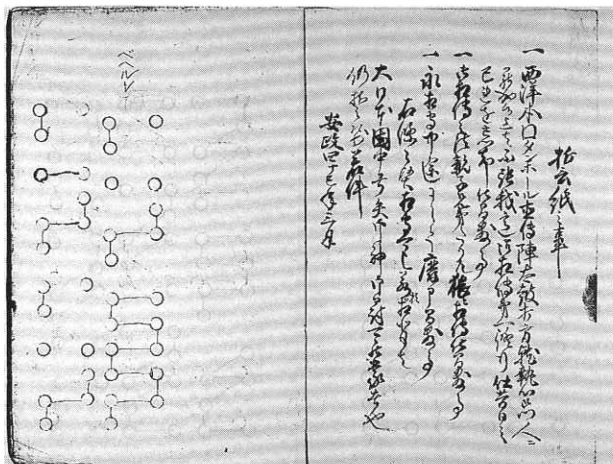
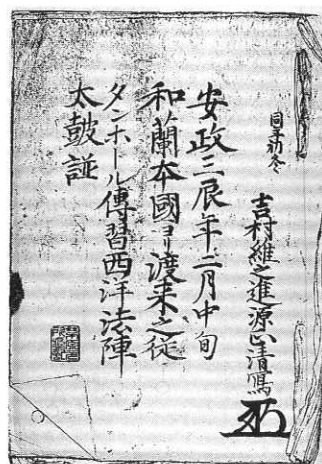
その後大正八年（一九一九）横須賀と和歌山から野戦重砲兵第二、第三連隊が三島へ移駐してきた時、それぞれの地元で大流行していた大阪ノイエ節・野毛山節が伝わり、三島の連隊を唄ったノイエ節も作られ宴席を賑わしていった。

大正末期に三島の花街に出入りしていた平井源太郎と矢田孝之はこの時期のノイエ節を洗練し、伝説となった農兵調練とその行進曲として売り出したものであろう。

「タンホール伝習西洋法陣太鼓譜」

（茅原弘氏蔵）

津藩に伝わる西洋式太鼓の譜。長崎の海軍伝習所に派遣された伝習生が伝えたもの。ベヘルレ、アツベル、フルカーデリング、ゲネウールマルス、トロツゲレマチー、ディンスマルス・フランスマルスの譜が和太鼓の形式で記されている。



民謡 三島農兵節

富士の白雪ノ一へ 富士の白雪ノ一へ
富士のサイく 白雪朝日で溶ける

とけて流れてノ一へ とけて流れてノ一へ
とけてサイく 流れて三島に落ちる

三島に下りてノ一へ 三島に下りてノ一へ
三島サイく 下りて女子の化粧の水

三島女郎衆はノ一へ 三島女郎衆はノ一へ
三島サイく 女郎衆はお化粧が長い

お化粧長けりやノ一へ お化粧長けりやノ一へ
お化粧サイく 長けりやお客がわかる

お客が怒ればノ一へ お客が怒ればノ一へ
お客サイく いかれば石の地藏さん

石の地藏さんノ一へ 石の地藏さんノ一へ
石のサイく 地藏さん頭がまるい

頭丸けりやノ一へ 頭丸けりやノ一へ
あたまがサイく まるけりやからすが止る

からすとまればノ一へ からすとまればノ一へ
からすサイく とまれば娘島田

娘島田はノ一へ 娘島田はノ一へ
むすめサイく 島田は情でとける

『三島市勢要覧 昭和二十五年版』

(昭和二十六年)

野毛山節 (現在)

一、代官山から ノ一エ 代官山から ノ一エ
代官サイサイ 山から異人館を見れば

ラシャメンとふたりで ノ一エ
ラシャメンとふたりで ノ一エ
ラシャメンサイサイ かかえて赤いズボン

二、代官山から ノ一エ 代官山から ノ一エ
代官サイサイ 山から蒸気船を見れば

太い煙突 ノ一エ 黒い煙が ノ一エ
黒いサイサイ 煙が横に出てる

三、秋の演習は ノ一エ 秋の演習は ノ一エ
秋のサイサイ 演習は白黒二軍

白黒二軍は ノ一エ 白黒二軍は ノ一エ
白黒サイサイ 二軍は演習は終る

四、野毛の山から ノ一エ
野毛の山から ノ一エ
野毛のサイサイ 山から異人館を見れば

お鉄砲担いで ノ一エ
お鉄砲担いで ノ一エ
お鉄砲サイサイ 担いで小隊進め

五、オッピキヒヤラリコ ノ一エ
オッピキヒヤラリコ ノ一エ
オッピキサイサイ ヒヤラリコ小隊進め

チーチーガタガッテ ノ一エ
チーチーガタガッテ ノ一エ
チーチーガサイサイ ガタガッテ小隊進め

(野毛山節保存会)

ノ一エ節 (野毛山節)

文久二年頃

野毛の山から ノ一エ
異人館を見れば 鉄砲かついで ならび足
おっぴきしゃらりこ ノ一エ
ちいちがたかつて ノ一エ
おっぴきしゃらりこ ノ一エ

『民謡歴史散歩 関東・中部篇』
(昭和三十年)

野毛の山から ノ一エ 野毛の山から ノ一エ
野毛のサイサイ 山から 異人館を見れば

鉄砲かついで ノ一エ
鉄砲サイサイ かついで小隊進め
オッペコシヤラリコ ノ一エ
オッペコシヤラリコ ノ一エ
オッペコサイサイ シヤラリコ
オッペコシヤラリコ ノ一エ

『民謡歴史散歩 関東・中部篇』
(昭和三十年)

野毛の山 (野毛山節)
(ビクター・レコード 五二〇一七)

歌の明治、大正、昭和の筆頭

野毛の山から ノ一エ 野毛の山から ノ一エ
野毛のサイく 山から 異人館を見れば

鉄砲かついで ノ一エ 鉄砲かついで ノ一エ
鉄砲サイく かついで ならび足

『豆・相・武の歌 郷土の民謡小唄集』
(昭和十年)

大阪のノ一エ節

サイサイ節

(文久のうへ節かはり 幕末「野毛の山から
ノ一へ」替唄・明治流行第一次)

天満橋から ノウルイ 天満橋から ノウルイ
天満サイサイ 橋から東を見れば
鉄砲かたねて ノウルイ
鉄砲かたねて ノウルイ

てつばサイサイ かたねて小隊進め
『明治流行歌史』藤澤衛彦編 (昭和四年)

ノ一エ節 (大阪城第二十師団の練兵の風景)

天満橋から ノ一エ 天満橋から ノ一エ
天満サイサイ 橋から東を見れば
鉄砲かついで ノ一エ 鉄砲かついで ノ一エ
鉄砲サイサイ かついで小隊進め

『日本民謡の旅』(昭和三十年)

ノ一エ節 (明治初年、大正六・七年流行)

大阪城から ノ一エ
大阪サイく 城から練兵場を見れば
鉄砲担いで ノ一エ
鉄砲サイく 担いで小隊進め

オッペコシヤラリコ ノ一エ
オッペコシヤラリコ ノ一エ
オッペコシヤラリコ ノ一エ

通天閣から ノ一エ 一目に見ゆるは ノ一エ
西は築港 東は天王寺 下に公園美術館
お城も見ゆるは ノ一エ 中ノ島見ゆるは ノ一エ
川口は舟々 陸には多くの自動車

オッペコシヤラリコ ノ一エ
オッペコシヤラリコ ノ一エ

『大阪の唄 増補』(昭和三十八年)



大根の碑（初音ヶ原松並木入口）
書は源太郎。昭和二十二年一月、川原ヶ谷の森崎平作が中心となり建立された。箱根大根の宣伝に尽力した源太郎を顕彰している。
「箱根八里の馬子唄消へて今は大根を造る歌 源水」



富士の白雪の碑（一番町白滝公園）
農兵節の元詞を源太郎が書した。昭和七年十月、三島水明会により建立された。
「富士の白雪朝日に溶て三島女騰衆の化粧水」

参考文献

○平井源太郎関係

- 『平井源太郎伝』秋津亘 文芸三島第十八号（一九九五）
- 『覚書・平井源太郎』秋津亘 三島民報 八・五〇十一・五掲載（一九九三）
- 『心に残る三島と箱根』山田重太郎（一九八四）
- 『ふるさとの想い出写真集 明治・大正・昭和 三島・修善寺』戸羽山瀚 国書刊行会
- 『郷土のあゆみ』坂郷土史研究会（一九九五）

○農兵節（ノエ節）関係

- 『三島市誌下巻』三島市（一九五八）
- 『静岡県の民謡 駿・遠・豆のさとうた』小塩絃典 静岡新聞社（一九八四）
- 『民謡に見る 静岡の歴史』江崎惇 新人物往来社（一九七五）
- 『郷土民謡 舞踊辞典』小寺融吉 名著刊行会（一九三四、八四 復刻）
- 『民謡歴史散歩 関東・中部篇』池田弥三郎 宮尾しげを編 河出書房新社
- 『神奈川県民俗芸能誌 増補改訂版』永田衡吉 錦正社（一九八七）
- 『豆・相・武の歌 郷土の民謡小唄集』横浜貿易新報社（一九三三）
- 『横浜市史稿風俗編』（一九三三）
- 『横浜古民謡集』上 横浜古民謡保存協会（一九五八）
- 『神奈川県民俗芸能誌・民謡編』神奈川県教育委員会（一九八二）
- 『大阪の唄増補』小西永軒 朝陽学院発行（一九六三）
- 『明治流行歌史』藤澤衛彦 春陽堂（一九二九）
- 『日本民謡の旅 下巻・西日本篇』高橋掬太郎 第二書房（一九六〇）
- 『流行り唄 五十年一啞蟬坊は歌う』添田知道 朝日新聞社（一九五五）

○農兵訓練・幕末軍楽関係

- 『江川担庵』仲田正之 吉川弘文館（一九八五）
- 『葦山町史 第五卷（下）、第六卷（下）』葦山町（一九九四）
- 『江川担庵全集』戸羽山瀚 巖南堂書店（一九五四）
- 『農兵に就いて』戸羽山瀚 伊豆史談会（一九四五）
- 『静岡県田方郡誌』静岡県田方郡役所（一九一八）
- 『幕末海軍鼓笛楽』升本清 蘭学資料研究会研究報告一八四号（一九六六）
- 『三重県における和蘭式軍楽について』茅原弘 蘭学資料研究会研究報告三七号（一九七〇）
- 『幕末陸軍軍楽』升本清、若林勅滋、ヤン・デ・フリース
- 『洋学』沼田次郎 吉川弘文館（一九八九）
- 蘭学資料研究会研究報告二八九号（一九七四）

出品協力者

- （三島市）平井一恵、光林文子、矢田孝子、川口泰弘、内田厚子、杉山源作、白井道允、関守敏、宇野世章、青木隆俊、言成地藏堂護持会、中町内会、三島農兵節普及会
- （沼津市）植松善夫
- （三重県津市）茅原弘

調査協力者

- （三島市）秋津亘、長谷川福太郎、露木久夫、森崎高広、杉本潔、三ツ谷老人会、三島商工会議所
- （葦山町）仲田正之
- （島田市）小塩絃典
- （横浜市）片山浪、野毛山節保存会
- （東京都）谷村政次郎、塚原康子

調査協力機関

NHK視聴者センター、伊予三島市企画人事課、横浜市立中央図書館、神奈川県立中央図書館、大阪府立中ノ島図書館、同中央図書館、横浜開港史料館、神奈川県立博物館、大阪市立博物館

企画展 農兵節と平井源太郎

会期 平成九年三月十八日
～五月十一日
主催 三島市郷土館
〒411 三島市一番町十九ー三
楽寿園内
☎〇五五九一七ー一八二二八
FAX〇五五九一八ー一三三七〇
発行 平成九年三月十八日